

## 日本産菌類集覧

著者：勝本 謙

入力編集：勝本 謙，安藤勝彦

発行：日本菌学会関東支部

ISBN 978-4-87974-624-5, B5 判 1177 ページ, 定価 8,400 円 (ソフトカバー)

「ついに出たか、ありがたい」それがこの本を最初にとった印象である。本書は、過去の日本産菌類のインベントリーの決定版ともいべき書である。インベントリーとは、「与えられた地域における(生物の)目録あるいはそのような目録を作成する作業」で、生態学・分類学、生物資源の利用などの基本となる情報である。日本における菌類のインベントリーは、白井光太郎(1905)の「日本菌類目録」に始まるが、ここには約1200種の菌がリストアップされた。その後改訂されたインベントリーは、原 撰祐(1954)によって集大成されたが、パソコンやワープロがない時代、このような作業がいかに大変なものであったかは想像に余りある。その後、50年以上にわたって、このインベントリーが改訂されることはなかった。そこで、本書の著者勝本先生はこの情報を訂正しつつ、日本産菌類情報を集大成するべく、本書の編纂に取り組みたと伺っている。

勝本先生は、平成17-18年度、筆者の職場である国立科学博物館に客員研究員として迎えられ、年数回筆者の研究室を訪問された。この際、勝本先生は朝早くから夜遅くまで図書室にこもられ、本書のために多数の文献情報を集められていた。本書のような集大成にわずかでもこのような形で貢献できたことは筆者にとっても望外の喜びである。

さて、このような大変な作業の末に完成された本書には、12000種余りの種数の分類群が収載されており、その中には裸名で記載されていたものも含まれるなど、日本の菌類相を広く取り扱った構成になっている。また、国際的なデータベースである Index Fungorum にも収載されていない種名が多数あり、守備範囲の広さをうかがわせる。

本書には2007年までに日本産が確認された菌(一部については2008年発行分まで)がアルファベット

順にリストされている。それぞれは掲載元の書誌情報、和名(提唱者名)、ホストなどを伴っており、別名で知られている場合には、異名も収載されている。巻末には和名、ホスト、著者名も索引として掲載され、分類表なども完備されており、菌類を専門としない読者にも十分な利用価値がある。

生物多様性条約の締結によって、日本には生物多様性国家戦略が整備されるようになった。その国家戦略(2010年版)には、「生物多様性の状況を科学的知見に基づき分析・把握する」ことがうたわれている。日本は世界有数の生物多様性大国であり、固有種も多い。その一方で、まだ多くの生物群において日本産の種のインベントリーが完了していない。そのような中で、菌類のような、微生物を含む生物群に本書のような集大成が出版されたことは、大変な快挙である。もちろん、本書の出版以来も新種・新産種の報告は相次いでおり、日本菌学会の発行誌をざっと調べただけでも年間約50種もの新産種(含新種)が出版されている。やはり、日本は菌類大国なのだ。しかし、このような事実にも関わらず、2007年までの日本産菌類を網羅的に調査した本書の価値は、まったく損なわれるものではない。むしろ、本書のようなデータの蓄積が日本新産種の検討を容易にし、日本の菌類分類学を強力に後押しする起爆剤としての価値をもっている。植物病理学、植物学、動物学など関係の研究者・研究室には図鑑類と一緒にぜひ座右におきたい書物である。

(独立行政法人国立科学博物館 細矢 剛)

購入申込先：日本菌学会関東支部企画幹事 本橋慶一  
〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1  
東京農業大学地域環境科学部電子顕微鏡室  
FAX：03-5477-2636 Email：k3motoha@nodai.ac.jp

---

**書 評**

---

## 放線菌と生きる —日本放線菌学会 25 周年記念—

編集委員：浜田 雅, 新井 守, 岩井 譲, 高橋洋子, 中島琢自, 堀田国元,  
松本厚子, 宮道慎二

発行：みみずく舎, 発売：医学評論社

ISBN 978-4-86399-101-9, 264 ページ+口絵 4 ページ, 定価 3,990 円 (税込)

放線菌に関する本ですが, 放線菌の特徴や性質を記載した教科書のようなものではなく, 放線菌を中心としてそれを取り巻く人間模様というか, 研究者間の交流と日本の放線菌学の歴史について書かれています。この本には, 戦後からの放線菌の研究にまつわる様々な出来事が書かれており, 紆余曲折を経て現在の形に至ったことがよくわかります。

本書は, 第 1 部「放線菌学会の歩み」, 第 2 部「放線菌研究の歩み」, 第 3 部「放線菌と生きる」の 3 部構成となっています。第 1 部では, 放線菌研究会の誕生エピソードや第 7 回国際放線菌学会議の日本開催, また学会誌の変遷や学会賞受賞者リストなどが記載されています。後の研究者が, 文献や史実を参考にしながら時系列的に歴史を記載することはできても, 実際の流れの中で個々の研究者がどのようにその学問に取り組んできたのか, あるいは今後取り組んでいくのかを知るのは案外難しいものです。ここでは, 歴史が淡々と記載されているのではなく, 当事者の先生方が当時を思い出しながら苦勞したことや発展につながった出来事を自分の言葉でつづっておられます。第 2 部では, 抗生物質の探索と発見, 実用化に至る過程が, それらにまつわるエピソードを交えながら時系列的に簡潔にまとめられています。詳細は別稿に譲るとされていま

すが, あまり注目されてこなかった分類群が, 世界的に抗生物質生産菌として注目されるようになり, 学術的に研究者が増えるのはもちろんのこと, 企業も参入してくると加速的に研究が進む過程を垣間見ることができます。今は一般的に用いられている「抗生物質」という名称が, 日本で定着するにも時間が必要だった, というエピソードも興味深いものです。その他, 希少放線菌の発見や *Streptomyces* 属細菌の分類学上の再同定, カルチャーコレクションとの関わりについても記されています。

この本で特徴的なのは, やはり第 3 部でしょう。第 3 部では, 個々の研究者が, 放線菌研究への思いをそれぞれの言葉で書き記しています。実績のある研究者から, 最近放線菌の研究に携わり始めた (と想像される) 研究者の熱意や抱負が掲載されており, 放線菌の研究が今後も継続的に発展をしていくであろうことを予感させます。

学問の発展の裏にはこれほど多くの人のつながりと努力が息づいていることを肌で感じ取ることのできる 1 冊です。正面から放線菌の歴史に向き合うもよし, 師弟関係を想像しながら読み解くのも一興かもしれません。

(独立行政法人製品評価技術基盤機構 村松由貴)